

粘土と石膏を用いた造形講座の考案と効果の検証
—「岡崎市定期講座講習あそび講座」における実践を通して—
Verification regarding formulation and effects of formative course
making use of clay and plaster
—Through practices in “Asobi (Play) Course: Okazaki City Fixed-Term
Course and Training Program”—

横田典子^{*} 佐善 圭^{**} 米窪洋介^{*} 後藤直美^{*}

YOKOTA Noriko, SAZEN Kei, YONEKUBO Yosuke, GOTO Naomi

要 旨：

本研究は、保育士初任者を対象とした「岡崎市定期講座講習あそび講座」において、考案、実践した造形講座が、受講者の造形活動に対する意識にどのような変化を与え、どのような形で受講者の保育実践に活かすことができたのかについて調査し、本講座の効果を検証することで、今後の保育士研修および保育士養成課程における教科内容の充実に繋げることを目的とした。検証の結果、本講座を通して、受講者の「日常的に造形活動を取り入れること」「造形活動の指導計画の立案」「子どもと一緒に色や形を通して遊ぶこと」に対する自信が高まったことに加え、「造形活動」自体の捉え方にも変化を与えた可能性が示唆された。また、受講者より提出された実践記録の調査からは、講座内容をふまえた保育実践が0～5歳の子どものみで可能であったことが明らかとなったほか、受講者が実際の子どもの姿に合わせて、講座内容から適宜変更を加えて実践を行っていた様子も窺えた。

Abstract

The objective of this research was to investigate how the formative course devised and put into practice in the “Asobi (Play) Course: Okazaki City Fixed-Term Course and Training Program” for beginning childcare workers changed the awareness of participants regarding formative activities and how the participants utilized what they had learned through this course in their childcare activities. The research also aimed at enhancing curriculum content in future childcare worker training and childcare worker training courses by verifying the effects of the course. The verification results showed that based on this course, the confidence of the participants increased with regard to “incorporating formative activities on a day-to-day basis,” “establishing teaching plans for formative activities,” and “playing with children based on colors and shapes,” and hinted at the possibility that the way of perceiving the “formative activities” themselves was also changed. A survey of practice records submitted by participants showed that childcare practice based on course content was possible for children of 0 to 5 years old, and it appeared that the participants carried out practice adding appropriate changes to course content in line with the actual situation of the children.

キーワード：造形活動、保育実践、粘土あそび、定期講習、保育士初任者

Keywords : formative activities, childcare practice, clay asobi (play), fixed-term course, beginning childcare workers

^{*}岡崎女子短期大学幼児教育学科 ^{**}岡崎女子大学子ども教育学部

I. はじめに

「岡崎市定期講座講習」（以下、「定期講座講習」とする）は岡崎女子大学・岡崎女子短期大学と連携協定を締結している岡崎市からの委託事業として、平成28年度より保育士初任者を対象として実施している。今年度は「あそび講座」という名称で、表現の領域を中心に、運動・音楽・造形に関する活動から、2～3歳のあそびについてアプローチするプログラムで行われた。

講習の目的は、保育士養成課程等検討会による「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」¹⁾に基づき、①保育現場に勤務する保育者も養成校の教員も共に「あそび」について深く考え、理論と実践が結びつく工夫をすること、②保育者と教員が交流することによって、相互に保育現場の現状を理解し、よりよい保育実践をめざしていくこと、③何よりも子どもがもっとあそびたくなる、保育者にとっては組立て甲斐のある保育内容を構築することとし、講座担当教員には、受講者の保育実践に有効かつ着実に活かすことのできる講座内容の考案が求められた。各表現領域の担当者は、それぞれの分野を専門とする教員2～3名と保育現場での指導経験を有する教員1名のチーム制とし、理論と実践が結びつくように構成された。

そこで筆者らが担当した造形分野では、上記の目的をふまえて粘土と石膏を用いた講座内容を考案し、実践した。

本研究では、今後の保育士研修および保育士養成課程における教科内容の充実に繋げることを目的として、保育士初任者の造形活動に対する意識調査を行うとともに、考案した講座内容が受講者の造形活動に対する意識にどのような変化を与え、どのような形で受講者の保育実践に活かすことができたのかという点に焦点をあて、本講座の効果を検証する。

II. 「岡崎市定期講座講習」の概要

1. 日程及び場所

- 第1回：平成28年5月20日（金）
 - 第2回：平成28年6月17日（金）
 - 第3回：平成28年8月18日（木）
 - 第4回：平成28年9月9日（金）
- 時刻：17:00～19:00

場 所：岡崎女子大学・岡崎女子短期大学

2. 受講者

岡崎市立保育園勤務者（正規2～3年目、臨時的任用1～4年目）73名

3. 講習の内容

講習は全4回の講座で構成された。初回は福尾野歩氏による「あそび講座」を全員で受講し、第2回以降は、受講者が3つのグループに分かれ、運動・音楽・造形の各「あそび講座」をローテーション方式で受講した。

III. 造形講座の概要

1. 造形講座の目的

筆者らは、「定期講座講習」の目的をふまえて、造形講座の目的を①受講者が講座の参加を通して、自ら造形あそびにおける作る楽しさや喜びを感じながら主体的に取り組むことで、その過程に見られる心身の動きを体感すること②実践を理論と結びつけ、講座を通して自ら経験したような心身の動きを子どもがより主体的に経験し、子どもの育ちにつなげることができるよう保育内容を構築するための工夫を体得することにした。

具体的な受講の流れは、受講者が講座でさまざまなあそびを体験し、講座内容をふまえて勤務先で実践する。その後、勤務先での実践内容を記録用紙に記入して、今後の現場での実践にも活かせるように共有することとした。

2. 題材設定

本講座は、粘土造形の研究者である中川織江が『「粘土造形」には「描画」にはない特徴が多く存在する』²⁾と述べているように、「可逆的な操作」「手を使った操作」「体力に応じた操作」「形態の保持」「量の保存」³⁾が可能であり、子どもの触覚や空間認識能力の発達を促すことに有効的に働く素材として保育現場でも日常的に使われる粘土素材を採用し、中でも「状態の変化」を顕著に感じ取れる土粘土を題材として決定した。

「状態の変化」とは、土粘土の持つ保水性により、固体から液体まであらゆる状態に変化するという性質によって生まれる。土粘土は、空気中に放置すると水分が蒸発して固くなる一方、水に浸

しておく、とろとろの液状に変化する特質があり、これは、土と水という天然物だけで作られている土粘土ならではの特質である。

また、合わせて型取り材として扱われる石膏を使用し、可塑性ある粘土の形状を硬化させて完成させる造形題材を考案し、採用することとした。

島田佳枝が粘土造形の研究法に関する論考の中で、粘土を用いた造形活動に多くの子どもが魅了される理由として、第一に働きかけに応じて形が変化する可塑性または応答性、第二に砂にはない粘着力、第三に「感覚や身体性の喚起」⁴⁾をあげ、「粘土は私たちの感覚を刺激してやまない素材」⁵⁾と述べている。

筆者らが「状態の変化」という特質を持つ土粘土を題材に設定した理由も、この感覚に対する働きかけが多いことにある。そして、この「感覚や身体性の喚起」は、土粘土が子どもの造形活動において大きな役割を果たすと筆者らは考えている。

磯部錦司は、『子どもが絵を描くとき』の中で、中村雄二郎の『共通感覚論』や岩田誠の『見る脳・描く脳』などの著書を基に、視覚が優位とされている大人に対し、諸感覚を連携させて環境（もの）を理解しようとする子ども特有の感覚について繰り返し述べ、全身で感じることの重要性を指摘している⁶⁾。

また、檜英子も『保育を開く造形表現』の中で、触覚は、視覚や聴覚とは異なり、手や指を自ら動かすことによって初めて生み出される感覚であることから、「能動的な探索者である子どもたちは大人より多くのことを触覚から得ています」⁷⁾と述べている。

このように、触覚や全身の感覚を使った活動が大きな意味を成すとされている乳幼児期において、「状態の変化」によって、触覚をはじめ、さまざまな感覚を通した育みが期待できる土粘土を保育活動に用いる意味は大きいと筆者らは考えている。

しかし、土粘土は、上記のような特質により、通常は恒久性を持たせるために焼成の過程を経なければならないこと、成形に適する固さでの管理が難しいこと、準備や片づけに時間がかかることなどの理由から保育・教育の場では敬遠する場合も多く、扱った経験のない保育士も多くいることが予想された。

神谷睦代も幼児の粘土造形に関する論考の中で、土粘土は保管や扱いの困難さと教育活動方法や効果的な指導が分からないという理由から、「粘土教材にしても、油粘土が主流を占め天然の粘土の使用度はきわめて低い」⁸⁾と述べ、何らかの方策の必要性を主張している。

以上のことから、筆者らは、この講座を通して、受講者が土粘土の扱いやあそびの多様さを自ら体験し、実際の子どもの姿に合わせて実践してもらうことが、講習の目的である「子どもがもっとあそびたくなる、保育者にとっては組立て甲斐のある保育内容の構築」に繋がると考えた。

石膏を用いた理由は、石膏が水を加えるだけで流し込みによる成型が可能であり、短時間で凝固すること、石膏もまた土粘土と同じように硬化という「状態の変化」を特質に持つ材料であり、その変化の過程には発熱反応があるなど、水分が抜ける様子が触覚を通して感じられる材料という点から、「感覚の喚起」に繋がることが期待できるからである。

加えて、石膏も保育の現場では、手形の成形等に使用されることもあるが、土粘土と同様に保育士が扱った経験がないなどの理由から他の材料よりも用いられる機会が少なく感じる。したがって、保育士初任者の中では初めて扱う受講者も多い材料を講座で用いることによって、「保育者が自ら造形あそびにおける作る楽しさや喜びを感じながら主体的に取り組むことで、その過程に見られる心身の動きを体感すること」という造形講座の目的において有効に働くことを期待し、設定した。

3. 講座内容

本講座は、表1のタイムスケジュールで行った。

実践したあそびは、「素材あそび」「形あそび」「型取りあそび」の3つであり、後半にはディスカッションを行った。受講者には、あそびやディスカッションの意味や意図を理解したうえで受講できるように、講座の冒頭にねらいを提示した。以下に内容の詳細と留意した事項を記す。

表1 タイムスケジュール

17:00	1) 導入 講師紹介 本日の流れとねらいの確認 材料についての説明
17:05	2) 素材あそび ねらい：素材に親しみ、ものの変化や手触りに気づいたり、感じたりして楽しむ
17:25	3) 形あそび ねらい：作る楽しさや、表現する楽しさを味わいながら、工夫をして遊ぶ
17:35	4) 型取りあそび ねらい：身近な素材に触れながらイメージを広げる、心を動かす出来事に触れる
18:10	片づけ
18:20	5) ディスカッション ねらい：実践を理論と結びつけ、子どもの育ちにつなげることができるような保育内容について考える
18:45	6) まとめ 片づけ
19:00	終了

1) 導入

導入では、講師挨拶のほか、講座の内容と各あそびのねらいが書かれたレジユメを配布して流れを確認した。また、材料についての理解を深めるために土粘土と石膏についての説明も行った。

2) 素材あそび

このあそびでは、まず10cm×10cmの乾燥した板状の粘土（タタラ）を手で割り、パステルのようを使用して黒い画用紙に絵を描いた。次に、その粘土をのし棒で粉状に砕き、半量の粉に水を加えて、どろどろとした状態の粘土（ドベ）にし、今度は指を使って感触を楽しみながら画用紙に絵を描いた。

絵を描き終えたら残りの粉末粘土を加え、成形に適した固さの粘土にして手で握って形を作り、できた形を構成し、グループで鑑賞しあった。

このあそびは粘土を砕く工程以外すべて手で払い、土の感触を十分に体感できるようにした。また、担当教員は、受講者に対して「触ってみましょう」だけでなく、「においを嗅いでみましょう」など、感じることに重点を置いた声かけを数多く行った。

3) 形あそび

このあそびでは、1kgの粘土を配布し、受講者に「どれだけ高く伸ばせるか」「だんだん大きく（小さく）なるように丸をいくつ作れるか」などの課

題を提示し、時間を制限して競い合った。

担当教員は、どのようにしたら高く、あるいは多く作ることができるのか工夫をするように促した。競い合うあそびを取り入れた理由としては、後半のディスカッションにむけてのアイスブレイク効果と造形活動における人間関係の領域の育ちに対する気付きを期待してのことであり、担当教員は「同じテーブルの人と比べてみてください」などの声かけを行い受講者同士の交流を図った。

4) 型取りあそび

このあそびは、形あそびで使用した粘土を1.5cm厚のタタラ状にし、そこにさまざまな素材（貝殻、木片、ねじ、ペンやペットボトルのキャップなど）を使ってスタンプングをしながら、イメージの広がりを楽しんだ。

その後、塩ビ板で枠を作り、石膏を水で溶いて流し込みによる成形を実践した。石膏が硬化の過程で発熱反応を起こしている際には「触ってみてください」などの声かけを行い、石膏における状態の変化も体感できるようにした。

5) ディスカッション

ディスカッションを行うに当たり、まずは保育所保育指針に示されるねらいおよび内容について表現領域を中心に見直した。配布した資料には、表現領域の他に、人間関係や環境の項目も抜粋して提示し、領域が相互に関係しあい、造形活動で得られる育ちが表現領域にとどまらないことも伝えた。

その上で受講者は、本講座での実践を振り返りながら、記録用紙に「日時」「子どもの年齢」「遊び」「場所（用意したもの）」「予想される姿（楽しんでいる姿）」を記入した。その際には理論と実践が結びつきやすいように段階を踏んで行った。

具体的な流れとしては、まず、講座内で実践したあそびにおいて、受講者が各あそびで、どのような時にどのようなことを思った、感じたのかを「遊び」と「予想される姿（楽しんでいる姿）」に記入して自らの体験を確認した。担当教員は、内容を振り返りながら「どのような要素があそびの中に含まれていたのか」「どのような姿がみられたのか」と実際の受講者の姿を例に挙げながら受講者に投げかけた。

次に、確認した自らの体験と、振り返った保育

所保育指針の内容を結び付け「予想される姿（楽しんでいる姿）」からそのあそびで「得られる（感じられた）育ち」を考えた。その際、担当教員は、講座の最初に提示した各あそびのねらいを再確認して、保育所保育指針の中から同じ言葉を探したり、「保育所保育指針にはこのような項目がある」など具体的な項目を挙げて説明を加えた。

その後、グループ内で「予想される姿（楽しんでいる姿）」、「得られる（感じられた）育ち」を共有したうえで、勤務先での実践に向けて、どのような活動が展開できるかについてグループ内で意見交換した。

6) まとめ

ディスカッションの間に硬化した石膏を型から外し、模様の凹凸が反転した様子を楽しみながら鑑賞しあった。担当教員は石膏の着色や保管方法、展示方法などについても見本を提示しながら紹介し、今後の実践に活かせるように説明した。

4. 勤務先での実践・記録

造形講座では、講座の受講後に講座内容をふまえて勤務先で実践することを課題とした。具体的な流れとしては、まず、講座の内容と勤務先の保育環境をふまえて活動計画を立て、記録用紙に「あそびの内容」と「予想される姿（楽しんでいる姿）」を記入する。その際、使用する材料は、油粘土などで代用することも可とし、受講者自身が各自、自由に年齢を設定することとした。また、実践終了後は、実際の子どもの様子をふまえて赤字で記録に追記して提出することとした。

なお、今回の「岡崎市定期講習講座」は2～3歳のあそびを対象に行なわれたが、筆者らは、勤務先での実践を課題としたことから、受講者が担当している年齢での実践も可とした。それに伴い、講座の内容も、2～3歳のあそびを中心にしたものの、他の年齢のあそびにも繋げられるように多様なあそびを取り入れて考案した。

IV. 研究方法

1. 質問紙調査

本講座の受講者である岡崎市立保育園勤務者（正規2～3年目、臨時的任用1～4年目）73名を対象に表2に示す質問項目と自由記述による質

問紙調査を講座開始前と勤務先での実践終了後に行った。本研究では、有効回答における事前と事後の変容について分析を行い、自由記述の回答もふまえて考察を行う。なお、質問項目は行動目標の形式で設定し、質問に対する回答は「とてもできる」「ややできる」「どちらでもない」「ややできない」「全くできない」の5件法で設定した。

表2 質問項目

事前	項目1	日常の保育のなかで、造形に関わる活動を取り入れることは？
	項目2	造形に関わる活動を取り入れた指導計画を作成することは？
	項目3	子どもと色や形を通して遊ぶことは？
	自由記述	造形に関わる活動で、困った経験があれば教えてください。
事後	項目1	日常の保育のなかで、造形に関わる活動を取り入れることはできそうですか？
	項目2	造形に関わる活動を取り入れた指導計画を作成することはできそうですか？
	項目3	子どもと色や形を通して遊ぶことはできそうですか？
	自由記述	講習に参加しての気づき、または感想があれば自由に記述してください。

2. 実践記録

受講者から提出された記録を土粘土、油粘土、小麦粉粘土、紙粘土等の「粘土素材を用いた実践」と「その他の材料を使用した実践」に分類し、まず「粘土素材を用いた実践」対象に、本講座で行った3つのあそびのいずれの系統に該当するあそびであったかについて年齢別にキーワードを設定して分類し、傾向を読み取り、考察を加える。また、「その他の材料を使用した実践」については、どのような実践が行われたのか調査を行い、あそびの種類と傾向を調査する。

V. 結果と考察

1. 質問紙調査

質問紙調査では、質問項目での有効回答は68名であり、自由記述については、事前57件、事後62件の回答を得た。調査の結果を項目ごとに記述する。

項目 1：日常の保育のなかで、造形に関わる活動を取り入れることは？

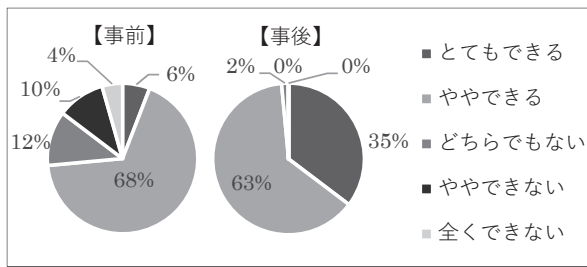


図 1 項目 1 事前・事後の結果

調査の結果を図 1 に示す。事前では「ややできない」「全くできない」と答えた受講者が 14% であった。その理由を自由記述の回答から読み取ると、「造形は好きだが、どう保育へ取り入れていくのか分からない」や「何歳でどのような造形を取り入れるのがよいのかが分からず困った」「アイデアがうかばない」など、保育現場への取り入れ方が分からないといった回答や、「自分が絵など、造形に対して苦手意識を持ってしまい、一般的に困っている」などの保育者自身の苦手意識から活動に繋がりにくい様子、「年少児の造形はどういったものが、適しているのか」「乳児でもできる造形あそびはどんなものがあるのか知りたい」など年齢に対応した活動が分からないといった原因が示唆された。

一方、事後の「日常の保育のなかで、造形に関わる活動を取り入れることはできそうですか？」との質問に対しては、98% の受講者が「ややできる」「とてもできる」と回答している。講座終了後には、受講した 73 名のうち 72 名の者から実践記録の提出があり、さまざまな形で子どもと造形活動が行われたことが分かった。課題とはいえ、実際に子どもたちと造形活動を行ったという経験が、今後の造形活動に対する自信を高めたのではないだろうか。

また、前述したように、担当教員は、講座において「触ってみましょう」「においを嗅いでみましょう」「温かさを感じましょう」など、「作る」ことだけではなく、「感じること」に重点を置いた声かけを数多く行った。事後の自由記述には、「子どもたちと一緒に、五感で感じてさまざまな表現を楽しむことが大切だと改めて感じました」や「造形は「作る」だけでなく、粘土を触る、砂の感触を味わう、というものも造形であることを

知れて、(中略) いろいろな経験をさせてあげたいと思うことができた」などの記述が見られ、作品制作以外の造形活動の展開を自ら体験したことで、「造形に関わる活動」自体の捉え方が広がり、数値が伸びた可能性も窺えた。

項目 2：造形に関わる活動を取り入れた指導計画を作成することは？

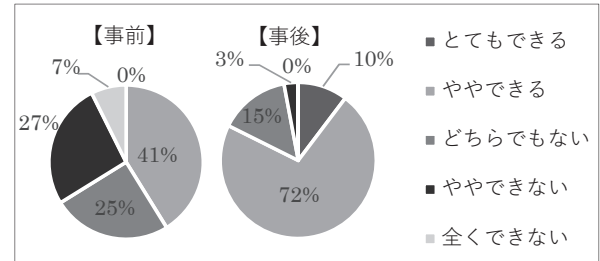


図 2 項目 2 事前・事後の結果

調査の結果を図 2 に示す。この項目では、具体的な指導計画の立案について質問した。事前の調査では、「とてもできる」と回答した受講者はおらず、「ややできる」の回答も 41% の半数以下と、質問した 3 項目の中で最も少ない数字であった。このことから、保育士初任者では、造形活動を取り入れたり、色や形を通して遊ぶことはできても、造形活動の指導計画を立案することには自信がない保育者が多いことが明らかとなった。

事後の結果では、「とてもできる」「ややできる」と回答した受講者が 82% と大きく増えた。ここにも、講座受講後の実践課題が大きく影響していることが考えられる。筆者らは、1 回目で実施した事前調査の結果から、指導計画の立案に苦手意識を持つ受講者が多いと推測した。そのため、前述したように、ディスカッションを行う際に、まずは保育所保育指針の内容を振り返ることから始めた。そして、記録用紙への記入についても自らの体験を確認し、保育所保育指針の内容と自らの体験を結び付け、「予想される姿(楽しんでいる姿)」から「得られる(感じられた)育ち」を考えるといった様に段階を踏んで行うことで理論と実践の結び付きを図った。

講座での受講者の様子は、最初はなかなか記録の記入が進まず、どのように記入したらよいのか、あるいは、自らの体験と「得られる育ち」が結びつかず、戸惑っている受講者もみられたが、担当教員の声掛けによって徐々に記入が進んでいく様

子がみられた。また、実践に向けてのディスカッションでは、グループ内で、担当している子どもの年齢や姿、勤務先の保育環境などを共有し、講座内のあそびを振り返りながら、「実際の子どもたちでは、どのような姿が見られるか」など、活発に意見交換が行われている様子が見られた。

以上のことから、本講座で実践した記録用紙を用いて段階的に理論と実践を結び付け、各あそびによって「得られる（感じられた）育ち」を考えた後、実際の「子どもの姿」と「育ちたい姿」にあてはめ、実践計画を立案するという流れを通して、受講者が「子どもの姿」と「育ちたい姿」から「保育内容」を構築するという計画立案の流れを体験することができ、その経験が指導計画立案に対する自信を高めたことが推察された。

自由記述の回答にも「同じグループの先生同士で、どのように保育に取り入れていくか、何歳ならこれができそう！などと、その場で意見交換をすることができ、とても役に立った」や「講習を自身が受けたことで、子どもたちと指導案を立てたあそびを楽しむことができた」、「計画の立て方を考えていくヒントを知ることができた」などの回答がみられた。

項目3：子どもと色や形を通して遊ぶことは？

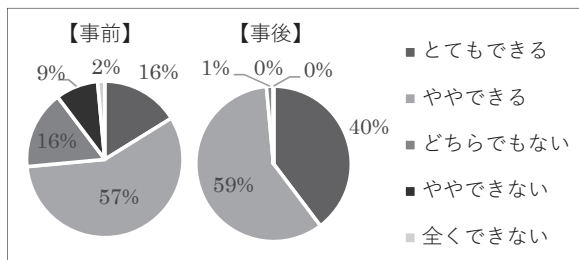


図3 項目3 事前・事後の結果

調査の結果を図3に示す。この質問は、保育者自身が子どもと色や形を通して遊ぶことができるというものであるが、調査の結果、事前調査で11%あった「全くできない」「ややできない」の回答は、事後調査では0%、「どちらでもない」との回答者も1%と大幅に減少した。このことから、保育者自身が本講座を通して「色や形を通して遊ぶ」ことに対する自信が高まったことが推察された。

自由記述の中でも「楽しかった」「楽しみ方を知ることができた」「楽しむ意欲がわいてきた」

などの受講者が本講座自体を楽しめたとの回答が頻出している。更に、「自分たちもあそびながら、楽しむことができたので、子どもたちと一緒に活動に取り入れていきたい」や「苦手意識のあった造形の講習を受けさせて頂いて、(中略)同じ粘土でも全く違う楽しみ方があるんだと気づき、子ども達と一緒に楽しみたいな、と感じました」など、自らの楽しかった経験を子どもと共にやりたいといった回答もみられたことから、受講者が本講座で造形あそび自体を楽しめたことがこの項目の回答に大きく影響を及ぼしたことが推測できる。

2. 実践記録

実践記録は、受講した73名のうち72名から提出され、複数回の実践を行った受講者もみられたことから、総実践数は139件に上った。調査の結果、土粘土、油粘土、小麦粉粘土、紙粘土等も含めた粘土素材を利用したものが90件、その他の材料を使用した物が49件であった。

1) 粘土を使用した実践の調査

この調査ではまず、実践した内容をあそびの系統別に分類するため、キーワードを表3のように設置した。

表3 分類のためのキーワード

素材あそび	感触、変化、粉、触る、握る、捏ねる、割る、丸める、ちぎる、叩く、延ばす	
形あそび	表現	好きな形にする、好きな形・物を作る
	人間関係	挑戦、比べる、競争、ゲーム
型取りあそび	スタンプング、型、模様、 ○○を使って (○○は粘土以外)	

キーワード設定の基本的な考え方としては、状態の変化や質感など、材料そのものを通じた感覚や運動操作によるあそびを「素材あそび」、何らかのイメージを基に形を作ることや作ることを通して友達や保育者と競い合ったりするあそびを「形あそび」、異素材を使って形や模様を作るあそびを「型取りあそび」としたが、「形あそび」については、形を作ることを楽しむことを主なねらいとして行った実践と、何らかの基本形態を競い合いながら作ることで、人間関係の領域での育ち

につなげることを主なねらいとしている実践とであそびの要素が異なると考え、何らかのイメージを基に形を作ることを「形あそび（表現）」、作ることを通して他者と競い合ったりするものを「形あそび（人間関係）」とした。

なお、「素材あそび」のキーワードに含めた「丸める」「伸ばす」も形を作る行為であるが、この操作によって生まれる丸や紐状の形態は、中川の先行研究によると、粘土造形の基本形態であるという、中川自身の研究成果に加え、『粘土造形における「おだんご」は形態の先駆的造形である』⁹⁾と述べていることから、筆者らは、「丸める」「伸ばす」は形を作るという造形意識による行為ではなく、運動的要素が強い行為と判断し、「素材あそび」に含めた。また、分類にあたり、複数の要素が含まれる実践については両者にカウントした。

分類の結果を表4に示す。

表4 粘土を使用した実践の分類結果

年齢	素材	形		型取り
		表現	人間関係	
0・1	6	0	0	2
2	11	3	3	8
3	11	2	5	13
4	4	0	2	2
5	6	0	7	3
3・4	1	1	1	1
3・4・5	3	1	3	5
4・5	7	1	7	4

分類の結果、実践された年齢は0～5歳と幅広く、本講座をふまえた実践がいずれの年齢でも可能であったことが明らかとなった。2～3歳を中心に、他の年齢のあそびにも繋げられるように多様なあそびを取り入れて講座内容を考案したことが有効的に働いた結果ともいえるだろう。

年齢別の特徴としては、0・1歳では「素材あそび」が最も多く、「型取りあそび」は実践されるものの、数は少なく、「形あそび」においては行われていない。2歳になると「型取りあそび」と「形あそび」の数が増え、「形あそび」における内訳は「形あそび（表現）」と「形あそび（人間関係）」で同数である。3歳での実践になると、「型取りあそび」が最も多くみられた。また「形

あそび」の内訳は、「形あそび（人間関係）」が「形あそび（表現）」を上回った。4歳のみでの実践は数が少なかったが、異年齢での実践や5歳での実践を見ると、友達と競い合ったり、比べたりする「形あそび（人間関係）」を行った受講者が多くみられた。

以上のことから、粘土を用いた実践では、年齢が上昇するに従い、「素材あそび」から「型取りあそび」、「形あそび（表現）」、「形あそび（人間関係）」の順に実践数の多いあそびが移行することが確認された。

また、特記すべき事項としては、「素材あそび」はいずれの年齢でも実践されていたこと、5歳児では、「素材あそび」と「形あそび（人間関係）」が数多く実践されていたことが挙げられる。このことについては、先行研究による子どもの発達段階についての知見を得ながら考察を加えたい。

子どもの造形的発達段階については、さまざまな立場から研究されているが、ここでは、ピアジェ（1896-1980）とローウェンフェルド（1906-1960）の発達段階説を参照する。加えて、粘土の発達段階について、中川の先行研究からも知見を得たい。

ピアジェは0～2歳頃を「感覚運動段階」、2～7歳頃を「前操作的思考段階」、それ以降を「操作的思考段階」として分け、「前操作的思考段階」は「表象的思考段階」から「象徴的思考段階」、「直観的思考段階」と移行するとしており、表象に至る前の段階での運動的段階の存在を説き、その後の段階は、表象（イメージ）による表現から象徴的な表現、強調的な表現へと展開している。

また、ローウェンフェルドの発達段階説は「スクリブル期（2～4歳頃）」、「カタログ期（3～6歳頃）」、「図式期（7～9歳頃）」である。スクリブル期は一般的に運動感覚と身体感覚の相互作用によって生まれるとされており、カタログ期は「頭足人」に代表されるようにものごとを象徴的に表現する。その後、基底線が現れてくるような、画面の上に構成しようとする意識が芽生える「図式期」に移行するとしている。

その他にも描画表現に基づく発達論は諸説あるが、運動段階からイメージの出現、象徴的な表現から徐々に表現された内容と意図が一致して行くといった流れで示されていることが多いと言えるだろう。

一方の粘土造形における発達段階では、中川は、

「粘土の特性が十分に反映された報告はみられない」¹⁰⁾として、これまで「粘土造形」の発達段階は、描画の発達段階に準ずるとされてきた定説を、再検討した結果、以下の4つの段階に分けることができるという結論を得ている。(以下引用)

「第1段階：操作は「いじる、こねる」といった程度にとどまる。造形意図がないので、操作との関連は成立しない。第2段階：造形意図が発生し、僅かながら形成的操作が持続する。ごく一部の塊にたいして関連が及ぶもので小さな作品が形成される。第3段階：造形意図と操作の関連が一部の塊に完全に及ぶが、まだ塊全体には及ばない。意図と操作の間には不完全ながらも関連ができる。第4段階：造形意図に沿った形成的操作が一貫して持続され、塊全量に及ぶ。意図と操作がしっかり関連づけられる。」¹¹⁾

以上の様に、中川の先行研究からも、造形意図が発生しない運動的操作段階から造形意図の発生、徐々に造形意図と操作が一致していくといった一連の流れを読み取ることができる。

また、楨は前掲書の中で、子どもの発達段階について、「実際の子どもの姿は、何歳であっても初めて出会ったものに対しては探索の段階に戻り、仲間と遊びの場面での模倣によって発達段階が移行する」¹²⁾と述べるものの、発達の流れを把握することは、子どもの育ちの順序性を理解して援助することに役立つと主張している。

筆者らは、講座内で行った各あそびのねらいとして、「素材あそび」では、状態の変化や質感など、材料そのものを通した感覚や運動操作によるあそびへの気付き、「型取りあそび」では、身近な物への興味や関心を持ったり、イメージの広がりを楽しむこと、「形あそびでは」作ったり、工夫しながら表現したりすることの楽しさを体感することや人間関係の領域が意識できることを主軸に考案した。そして、各あそびのねらいを講座の最初に受講者に提示し、ディスカッションにおいても保育所保育指針にあてはめながら再確認した。

受講者の実践にみられた「素材あそび」から「型取りあそび」、「形あそび(表現)」、「形あそび(人間関係)」の順に実践数の多いあそびが移行する傾向は、「形あそび(表現)」がやや少なく感じられるものの、運動的操作段階のあそびからイメージ(意図)の発生、徐々に造形意図と操作が一致していき「形あそび」が発展していくという流れ

として捉えることもできるであろう。「形あそび(表現)」が少ない理由としては、本講座の内容では大きく取り入れられなかったためとも考えられるため、今後の課題としたい。

そして、特記すべき事項として述べた「素材あそび」がいずれの年齢でも実践され、5歳児の実践では、「素材あそび」、「形あそび(人間関係)」が数多く実践されていたことも、楨の主張に当てはまる結果といえよう。

また、使用された粘土の種類は、講座で配布した土粘土が最も多かったが、保育現場で身近な油粘土も多く使用されていた。また、0～2歳での実践では、安全に配慮し、小麦粉粘土や米粉粘土など食材を原料とした粘土で代用している実践も数多くみられた。この時期は、特に全感覚を用いて対象をとらえようとするところから、誤食に配慮してのことであることが推測でき、ここからも受講者が実際の子どもの姿をふまえて活動内容を決定していた様子が窺える。

2) その他の材料を使用した実践

実践された活動内容を年齢別に表5に示し、行われた回数を()内に表記する。

表5 その他の実践内容

年齢	あそび
0・1	砂場あそび(6)、スタンプング(5) 絵を描く(3)、その他の制作(3)
2	砂場あそび(5)、スタンプング(2)、絵を描く スライム、その他の制作
3	砂場あそび(4)、はじき絵、絵を描く、スライム その他の制作
4	砂場あそび、絵の具あそび
5	スクラッチ
3・4・5	砂場あそび、スライム、染め紙
4・5	フロッタージュ(2)、スクラッチ(2)、 その他の制作(3)

調査の結果、砂場あそびを行った受講者が大変多く、活動の内容を見ると、砂の感触を味わったり、水をかけて変化を楽しんだり、カップ等に入れて型取りあそびをしたりしている実践が数多くみられた。

本講座は、乾いたパステル状の粘土で絵を描き、その後、粘土を粉状にするところから始めた。粉

状の粘土に水を加えてドベにしていく工程は、砂場あそびとも類似している。題材設定でふれた鳥田の「粘土を用いた造形活動（造形遊び）」に多くの子どもが魅了される」第二の理由は、砂にはない「粘着力」であったが、一方で、粉状の粘土のさらさらとした触感や、水を加えることで感触が変わる「状態の変化」は、どろっとしたドベ状がざらざらとした感覚に変わるものの、粘土よりも平易に体験できる。加えて、受講者の勤務先には砂場がある環境が多いことなどから、粘土を砂に置き換えた実践が多くみられたと推測される。

また、0～2歳では、スタンプングを実施した受講者も多くみられた。スタンプングの方法は、オクラなどを用いた野菜スタンプ、タンポに絵の具を染み込ませて行うものなど、多様であったものの、「型取りあそび」のスタンプングから発想を得て、手の力が弱く、粘土に押すことが難しいことも予想される0～2歳向けに、受講者が子どもの姿に合わせ、適宜変更を加えて実践した結果ともいえるだろう。

Ⅵ. まとめと課題

本研究は、保育士初任者を対象とした「岡崎市定期講座講習」において、考案、実践した造形講座が、受講者の造形活動に対する意識にどのような変化を与え、どのような形で受講者の保育実践に活かすことができたのかについて調査し、本講座の効果を検証することで、今後の保育士研修および保育士養成課程における教科内容の充実に繋げることを目的とした。

検証の結果、質問紙調査で日常的に造形活動を取り入れることに対する自信について質問した項目1では、勤務先で実践を行ったことで、今後の造形活動に対する自信が高まったことが示唆された。また、講座の中で担当教員が「感じること」に重点を置いた声かけを多く行ったことで、「造形活動」自体の捉え方が広がった可能性も窺えた。

指導計画立案への自信について質問した項目2では、記録用紙を用いて段階的に理論と実践を結び付けるといったディスカッションの流れを通して、受講者が「子どもの姿」と「育ちたい姿」から「保育内容」を構築するという計画立案の流れを体験することができ、その経験が指導計画立案に対する自信を高めたことが示唆された。

更に、子どもと一緒に色や形を通して遊ぶことに対する自信について質問した項目3では、受講者自身が本講座で造形あそびを楽しめたことで、子どもと一緒に色や形で遊ぶことに対する自信に繋がったことが確認された。

実践記録による調査では、本講座をふまえた実践が0～5歳の子どもに可能であったことが明らかとなったほか、ピアジェとローウェンフェルドの発達段階論を参照しつつ、中川による粘土表現における発達段階、槇の発達段階に対する主張から知見を得て考察を加えた結果、受講者が講座で体験したあそびの中から実際の子どもの姿に合わせて活動内容を適宜変更していた様子や、粘土を砂や絵の具に置き換えるなど、用いる材料を変更していたことも明らかとなった。

一方で本研究の結果からは、本講座では「形あそび（表現）」の系統に該当するあそびの内容が少なかったことも明らかとなった。短時間かつ一日の講座という理由があるものの、上記に該当するようなあそびも取り入れていくことで講座内容を更に充実させることができると考えている。また、事前のアンケートには、嫌がる子や苦手意識をもっている子に対する援助方法が分からないといった意見も多かった。今後は、上記のような本研究で得た知見を基に保育士研修や保育士養成課程における教科内容の充実に繋げていきたいと考えている。

謝辞

本研究の実施に当たり、質問紙調査にご協力頂きました、岡崎市職員の方々、また「岡崎市定期講座講習」の運営統括者である岡崎女子大学矢藤誠慈郎先生、大岩みちの先生に深くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 保育士養成課程等検討会『保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）』（2010）
- 2) 中川織江『粘土造形の心理学的・行動学的研究』風間書房（2001）p.6
- 3) 中川織江 前掲書 p.7
- 4) 鳥田佳枝「幼児の粘土造形の研究方法をめぐって—一関係論的観点の意義と可能性について—」『埼玉学園大学研究紀要（人間科学部篇）』第11号（2011）p.235

- 5) 島田佳枝 前掲書 p.235
- 6) 磯部錦司『子どもが絵を描くとき』一藝社
(2006) pp.11-30
- 7) 槇英子『保育をひらく造形表現』萌文書林
(2008) p.16
- 8) 神谷睦代「発想を豊かにするきっかけとしての
「粘土遊び」『千葉敬愛短期大学紀要』第
26号 (2004) p.97
- 9) 中川織江 前掲書 p.132
- 10) 中川織江 前掲書 p.11
- 11) 中川織江 前掲書 p.147
- 12) 槇英子 前掲書 p.70

参考文献

- ・文部科学省『幼稚園教育要領解説』(2008)
- ・厚生労働省『保育所保育指針解説書』(2008)

執筆分担

- 横田：第Ⅰ～Ⅱ章、第Ⅲ章 第1節、第Ⅳ～Ⅵ章
佐善：第Ⅲ章 第2節
米窪：第Ⅲ章 第3節 第1～4項、第6項
後藤：第Ⅲ章 第3節 第5項、第4節

